開学五十周年と紀要第五十四輯の発行を祝って

院長　深町　正信

この度、青山学院女子短期大学が開学五十周年を迎えたことは学院関係者一同の大きな慶びであります。この機会に、短期大学紀要第五十四輯を記念号として発行されることを大変に意義深く思います。

青山学院の歴史は、まず女子教育から始まりました。一八七四年（明治七年）にアメリカのメソジスト監督教会から派遣された宣教師スクーンメーカー女史が、津田仙等の協力を得て、麻布に開校した「女子小学校」であります。その四年後に、男子部門の宣教師ジュリアス・ソーパー博士を中心として「耕教学舎」が開学され、翌年、ロバート・マクレー博士によって開校された「美会神学校」がやがて合併されて、学院の母胎となりました。その後青山の地に移転して、一八九四年（明治二七年）第二代院長、本多庸一先生のときに青山学院と改名され、女子学校の流れは青山女学院となり、更に、二者が合併して発展、成長したのです。

第二次世界大戦の後、一九四七年（昭和二二年）に文部省の大きな学制改革があり、青山学院は女子短期大学と男女共学の大学と、高中部以下初等部までを設立しました。更に、一九六一年（昭和三六年）に、現在の幼稚園が設立されて、幼稚園から大学、大学院までを備えた総合学園となりました。

顧みて、一八七〇年から一八八〇年代は明治維新後間もない頃であり、新しい日本の学校教育の先駆けをなしたの

が、全国主要都市につくられたミッションスクールであります。封建的、男女差別の著しい日本の社会に、女子教育に専念する数多くのキリスト教学校が生み出されました。キリスト教信仰を根底とする人間形成への努力が重ねられました。青山学院の女子教育では、殊に戦後は短期大学に至るまでキリスト教学校の中でも先駆的で、リーダー的役割を果たしてきたということが出来まして、誠に感謝であります。

しかし、今日、日本の社会で短期大学、大学に学ぶ人は、男女で約四七・三％、女子のみでは四八・九％となりました。これに専門学校は約一六・八％ということです。その反面、少子化の影響で、今年度は大学の三十％が定員に満ちず、また短期大学の約七十％が定員を満たせなかったということです。

それから二十年余前の米国がそうであった様に、日本でも共学志向を背景に、女子大学の人気が低迷していると言われていますが、米国の状況からも推測してもう一度、女子大学の教育の特徴が見直されると思われます。

女子大学で女性は創立以来のびのびと学び、自立心に富んだ人間の育成がリーダーシップを育てもしてきました。更に男性中心の学問が取り扱ってこなかった生活科学や福祉、女性学などの学問に取り組んできたことは、大きな業績であると思います。しかし、現状のままでは、教育の内容や研究の質の向上に努めないならば、その大学は近い将来において必ず淘汰されることが予想されます。今後は、女子大学がこれまでの優れた業績を再検討し、新しく学問と教育の充実に役立て、学生の教養の深化を計ることが大切な課題であると考えます。二十一世紀の世界と市民、男女や家族のライフスタイルを思う時、この大学の研究と教育に大きな意義を思うものであります。阿部幸子新学長を中心として、青山学院女子短期大学が、女子の伝統ある高等教育の機関としてますます充実、発展されますことを心から期待して、ご挨拶といたします。